歴史地震
第16号（2000）226-229頁

天保6年6月25日（1835.7.20.）地震は津波をともなったか

Did any Tsunami follow the large Earthquake occurred in Tohoku Region of JAPAN on July 20, 1835 ?

茅野　一郎
地震予知総合研究振興会
KAYANO Ichiro
Association for the Development of Earthquake Predictin

天保6年6月25日（1835.7.20.）の地震の津波について疑問に感じているところがあるので，教えていただきたいと思います．

この地震には，多数の史料があって，東北地方を中心に各地の地震の状況が詳しく記されていますが，津波があったとするものは少ないのです．

大津波があって，家が数百軒流され，死人数知れず　など被害があったと書いてある史料は，『泰平年表』，『十三朝紀聞』，『慶弘紀聞』，『校正王代一覧』，『地震記』（金沢市立図書館）など，大部分が遠方の史料のようで，内容が抽象的で，リアリティが足りないようです．

『東藩史稿』，『六代治家記録　龍山公』などは仙台（伊達）藩のかなり公的なものだと思いますが，そこに全然触れられていないのも不思議に思います．

山奈宗眞（1847生）『岩手県沿岸大海嘯取調考』は確かな著者の確かな本でしょうが，直後に行ってみたというわけではないですネ．残念なことに，何から資料を得たか，誰から聞いたか　は明記してないようです．津波があって海岸から150間水が上がったが，湊人家には損害がなかったと書いてあり，状況がいま一つ釈然としませんが，必ずしも大津波とはいえないのではないかと思います．

唯一具体的なのが，羽鳥（1975）に引用してある野蒜の状況で，渡辺さんもこれに基づいて書いているのだと思いますが，これの出所は池上（1900）だそうです．なぜか，今までに出た史料集には，拾遺も含めて，載っていないようですが，小生の見落としでしょうか．

東京大学地震研究所図書室にもあったと思いますが，国会図書館へ行ってコピーを取ってきました．野蒜のことはここからでているようですが，しかしこれも出典が何か明記してありません．

池上には天保七年となっています．

田山によれば，天保六年六月廿五日は武江年表による　江戸の記事だけで，天保七年七月二十五日丙午陸前国仙台地強ク震ヒ，屋舎頽損セリ　とあり，根室一等測候所報告に津波のことが出ています．

同じ頃，洪水などがあったらしいことが，あちこちに出ています．

天保6年6月25日（1835.7.20.）の地震の津波の存在が疑わしいとなると，では，震央はどこか，Mはどのくらいかということが次の問題になります．

この地震の震度分布は，震度V相当が岩手県南部から宮城県北部にかけて，長径約60kmくらいですが，（大地震が震度IVに相当するかは一応お預けにして）震度IV相当は青森県南部から関東地方南部にかけて広い範囲に亘っています．

震央は内陸か，海か，宇佐美の震央は津波の存在を暗黙に認めているようにも見えます．

ここで，ハタと思い当たったのが，1978年宮城県沖地震です．図の右に震度分布を載せますが，よく似ています．

1978年宮城県沖地震では津波があったそうですが，最大仙台新港で49cmだそうですから，検潮器のなかった時代には津波の存在が認められなかったとしても不思議はないでしょう．

そこで，1835年の地震の震央としては，1978年宮城県沖地震のそれ（38°09′N，142°10′E）を四捨五入して，38°N，142°E，或いは，38.5°N，142°E，Mは1978年宮城県沖地震より少し小さくて，M＝7.2～7.3というところでしょうか．

（2000.7.20.記）

表1　津波のことを記す史料

増訂　p.417－418.
『泰平年表』　著者　忍屋隠士（大野廣城）　成立　天保十二年序
「同六月廿五日仙台領大地震、居城大破、大津浪にて民家数百軒流失死人数知らず」
『十三朝紀聞』　著者　安田照矩　成立　文久元年刊
「仁孝天皇［○天保］六年陸奥國仙台ノ地大ニ震ヒ城墨壊レ且ツ海溢レ民家数百ヲ破リ溺死スルモノ算ナシ」
『慶弘紀聞』　国書総目録によると十三朝紀聞の別名だそうだが
「二十五日［○天保六年六月］仙台地大震海溢、城墨震毀、民家数百間没壊、溺死者多」
『校正王代一覧』　国書総目録で不明
「六月廿五日、仙台大ニ地震シテ、城墨大破シ、津浪ニテ民家数百ヲ流亡シ、溺死スル者数ヲ知ラズ」
『岩手県沿岸大海嘯取調考』○山奈宗真著　　かの有名な
「天保ノ津波（天保六年六月ナラン）ニ湊人家ニ破損無、海岸ヨリ百五拾間マデ浪走タリト云（綾里村ノ条）」

新収四　p.711.
『地震記』金沢市立図書館
「一同年六月廿六日仙台領大地震海辺大津浪ニテ民家数百間流失シ死人数ヲ知ラズ」

地学雑誌,12(1900),467-476.
『陸前地方の強震について』,池上稲吉
「（天保七年六月廿五日の地震で）野蒜港の如きは津浪の為め海岸全部を洗はれ被害多かりし、爾後続震止まざりしか為め七昼夜間も山上に露宿したりと、今尚ほ高く海濱に聳ゆる松樹に海藻類を打懸けたりといふを以て見るも津浪の高を想像するに足るべし」

表2　津波の事を記さない史料

増訂三
『東藩史稿』
「六月二十五日、仙台地大ニ震ス、牙城石屏崩ル、幕府ニ告グ」
『天保四年辛巳凶歳』［○仙台藩］　年に注意
「六月廿五日昼八ツ時大地震、誠に諸々［○所々］にて家土蔵甚損じ、又閏七月七日大あらし、大水、大橋落る」

新収続補遺
『六代治家記録　龍山公』
「二十五日、仙台地大ニ震ス、牙城石屏崩ル、之ヲ幕府ニ聞ス」
新収四　p.710　の『仙台市史』の引用も同文

この三つ、仙台（伊達）藩の史料としては信憑性の高いものだろうが、津波に全く触れていない。

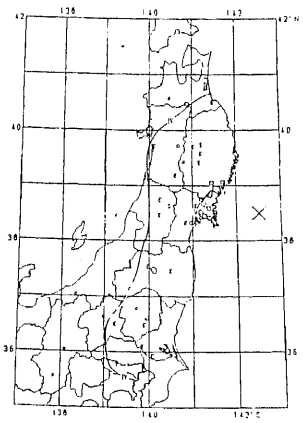
表2　津波の事を記さない史料（つづき）

増訂三　p.417 ～
『武江年表』　『刈田郡誌』　『続王代一覧後記』　『斎藤月岑日記』
『天保年中巳荒子孫伝』○羽前最上郡南山村庄屋梯(?)崎弥左衛門義在著

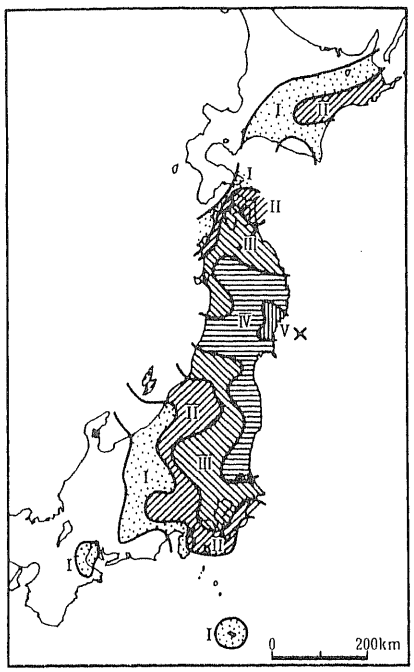
新収四　p.709～713
『遠山家日記』○八戸　『御用人所日記』○八戸　『南部藩(花巻城代)日記』
『雑書』○盛岡　『大原町誌』○岩手県　『花巻市史』　『沢内年代記』
『雫石歳代日記』『地震災害年代表（抄）』○岩手県　『塩釜市史』
『御日記（御国）』津軽藩　『気仙沼町誌』　『志田郡沿革史』
『新月村史』○宮城県　『宮城県河南町誌』　『登米郡新田町史』○宮城県
『涌谷町史』○宮城県　『宮城町史　史料編』　『宮城県若柳町史』
『大郷町史』○宮城県（続補遺に詳しい）　『高清水町史』○宮城県
『唐桑町史』○宮城県　『近世日誌』○宮城県迫町　『天保耗蔵鑑』○石巻
『懐堂日暦』○仙台
『渋江和光日記』○秋田　『稲川町史資料編三』○秋田県
『万日記』○山形県大石田　『近代家譜録』○出羽国村山郡大井沢村
『梯原藩日記（江戸）』　『懐堂日記』○江戸　『水野家日記』○江戸
『水野家日記　別本』○江戸　『備忘録　静軒君日録』○江戸
『御日記（江戸）』津軽藩　『（遠山家）領主日記』○江戸
『大島家日記』○北葛飾郡大島村　『日光社家御番所日記』『赤城神社年代記』
『千葉県気象災害史』　『暦史』○中頸城郡清里村馬屋専福寺

補遺　p.831～833
『御年代記』○仙台　田村家文書　『長沢村災異記』○岩手県
『定留』○陸前高田市気仙町　『世間風唱書之事』○陸前高田市気仙町今泉村
『勇蔵覚書』○女川　『守山藩御用留帳』○福島県　『松平容敬日記』○会津
『樫村家年中公私日記』○福島県郡山　『万日記』○栃木県壬生
『青木家気候日記』○栃木県宇都宮　『吉野家日記』○流山
『新見記録』○江戸　『森田十兵衛日記』○五日市
『上州中山新田宿本陣平形作右衛門家日記』○群馬県吾妻郡高山村
『北原家日記（因信日記）』○飯田市座光寺

続補遺　p.618～621
『大童家文書』○仙台　『年中記録』○松島町桜渡戸
『大郷町史』○宮城県　「田一円どろの如し」　『花井日記』○涌谷町
『日要礼』○盛岡（中島積水自筆日記）　『年豊凶干支四季気候録』○気仙沼
『相馬藩世紀』　『累世年鑑』○福島県川俣　『桜田良佐日記』○佐野
『細川家旧記』「廿七日大嵐に而家流れ」　『井沢篤之進日記』○上田市越戸



1835年 7月20日
（天保 6年 6月25日）
仙台の地震
経度 142.5 緯度 38.5 (D)
M＝7.0
（日本電気協会，1994）



1978年宮城県沖地震の
震度分布（気象庁による）

都司嘉宣先生のコメント
Comment by Prof. Y. Tsuji

改めて天保6年6月25日宮城県沖地震津波について，少し考えてみました．
本格的な調査はしておりませんが，わたしが気が付いたことを記しておきます．

（1） 池上(1900)論文は，「天保七年六月二五日」としていて，いまは原文が確認できませんが，「天保七年」という記載を重視します．じつは天保7年に松島湾は未曾有の高潮に襲われているのです．

『登米郡誌』は「天保7年7月18日（暴風による被害の記載の途中）この折り海辺は海嘯ありて津山のごとく，居家まで押し入り，また田地までも押し回す．また塩釜神社の老松根倒れ，中折れ百四本，御城下（仙台）表橋梁落ち，溺死者数多しとあり．」としていて、「松島湾に台風高潮がおき，市街地の家屋，田畑に海水が浸水しています．また仙台でも城下で橋が落ちた．溺死者が多かった」というのです．

つまり「天保7年，津波（実は高潮）で仙台付近松島湾で溺死者が多くでた」というのは正しいのです．野蒜港もまた松島湾に面しています．（なおこの台風は東京湾にも高潮を起こしています）

（2）天保6年6月25日の松島湾内のようす

『年中記録』（松島町桜渡戸）「壁落ち，家倒れかかり．田一面泥．」

この桜渡戸は現在松島町の少し内陸山間部，野蒜とはわずか7kmを隔てる場所．松島湾内の異常を記していない．

（3）綾里の「天保の津波」を「天保六年六月二五日」の津波と理解してよいか？

天保6年6月25日の地震では，陸前高田市気仙の人は地震のあと固唾を飲んで津波の来襲に注目している。『定留』○陸前高田市気仙町

しかるに津波はなかった．『世間風唱書之事』○陸前高田市気仙町今泉村

また，宮城県気仙沼にも津波はなかった．『年豊凶干支四季気候録』○気仙沼。宮城県女川にも津波はなかった．『勇蔵覚書』○女川

三陸町綾里の「天保の津波」をこの地震のことと理解してよいか？　ダメです．

天保14年3月26日の，根室沖地震の三陸の津波記事

『長沢村災異記』（岩手県）

補遺 p.887 に注目！

「三月二六日，朝六つ時にて大地震揺り，所々よだよせる．赤崎村にて，家いだみ等これ有り候よし．」

「よだ」とは小さな津波．赤崎村は現在岩手県大船渡市の一部、大船渡湾の東岸に当たる．三陸鉄道「りくぜんあかさき」駅あり．ここで津波による家屋破損の被害がでているのです．陸前赤崎と綾里はわずか6kmしか離れていない．当然「綾里にも少しの津波があったはず」そのとうり．それが

『岩手県沿岸大海嘯取調考』○山奈宗真著　に「家の被害もない．たいしたことない津波」と書かれているのです．

（天保6年6月ならん）は山名宗眞のたんなる思いつき．彼自身断定していません．

この津波は三陸では宮古でも「海辺ことごとく津波，鍬が崎浦水これ無くして，それより水かさなり」『宮古市史』（続補遺 p.657）と記されています．

三陸で「天保の津波」というのは天保14年3月26日の津波のことです．

その他の海岸記事，ことに「地震のあとには津波が来ることがある」と知っていた人の記述．

以上，わかったところまで．

(2000.11.30.)